

日本のフルート産業の特異性 ——他管楽器産業との比較

中道彩友 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

要旨

日本のフルート産業では、楽器総合メーカーであるヤマハ株式会社（以下「ヤマハ」）だけでなく、株式会社村松フルート製作所（以下「ムラマツ」）を中心とする中小企業が多く存在している。一方、他の管楽器産業は、そのほとんどが「ヤマハ」中心といった様態である。そこで、他の管楽器産業と比較したフルート産業の異質さは、研究対象として着目するに値するものと考えた。しかしながら、日本の楽器産業に関する先行研究は、そのほとんどが市場規模の大きなピアノを扱ったものであり、国内のフルート製造をテーマとした研究は非常に少ない。また、フルートやサクソフォン以外の国内管楽器産業においては、先行研究においていまだ触れられていない状況である。このような背景から、本論文では、日本の管楽器産業を概観し、その中でフルート産業に現れている特異性を見出すことを目的とする。

本論文は全3章から構成されている。

第1章「日本の管楽器製造史」では、草創期から戦中、戦後、「ヤマハ」に吸収合併されるまで日本の管楽器製造業界をリードし続けた日本管楽器株式会社（以下「ニッカカン」）を軸とし、日本の管楽器製造の黎明期から戦後の学販による需要拡大までの管楽器産業までの流れについて記述した。

第2章「日本のフルート産業」では、先行研究より日本のフルート産業の誕生から、戦後のスピノフ企業の増大まで、日本のフルート産業の歴史的変遷を記述した。第1節では「フルート産業の誕生」として、国産フルート第一号を手がけた村松孝一と、戦前や戦中の国産フルートの二大ブランド、「ムラマツフルート」、「ニッカカンフルート」について取り上げた。ここでは、国産フルート、および二大ブランドの誕生には村松孝一が深く関わっていることが確認できた。第2節では、「戦後のスピノフ企業」について記述した。「スピノフ」とは、赤松裕二によると、「既存の企業・組織から離脱（breaking off）した個

人・グループにより形成された新しい企業であり、親企業との関連産業において事業を展開する新しい企業」のことである（赤松 2018）。この定義に基づき、1960年代以降に「ムラマツ」や「ニッカン」からスピノフする企業が現れはじめたことが指摘できる。第3節「現在のフルート企業とその分析」では、赤松（2018）から「母体企業」、「管理職経験の有無」、「スピノフの契機」の三つの観点を引用し、赤松（2018）で検証された「サンキョウフルート」、「パールフルート」、「サクライフルート」以外のスピノフ企業について分析した。スピノフの転機になっている理由として最も多かったのが、「自分なりの」フルートが作りたいという意志であるということがわかった。その理由の一つとして、「アルタスフルート」の事例のように、「ムラマツ」の工場における分業的な生産が、職人の独立欲求を刺激していることが確認できた。「ミヤザワフルート」と「マスターズフルート」においては、創業者の管理職経験がスピノフに影響を与えている側面が確認できた。

第3章「その他の日本の管楽器の製造と産業発展」では、『ミュージックトレード』の記事をはじめ、資料からわかる各管楽器産業の起源と、現在のメーカーについて記述した。第1節「サキソフォン」では、サキソフォンがフルートより9年遅れて製造が始まり、戦前や戦中には田辺楽器とニッカンが生産を担っていたこと、現在では中小企業も含め6社が生産を行っていることが確認できた。第2節「クラリネット・オーボエ・ファゴット」では、まず、クラリネットについて記述した。そこでは、クラリネットはフルートより7年早く製造が始まり、戦前や戦中にはサキソフォンと同じく田辺楽器とニッカンが生産を担っていたこと、現在では中小企業も含め3社存在することが確認できた。次に、オーボエとファゴットについて取り上げた。オーボエとファゴットは国産化の動きが遅く、長らく輸入品頼りであったが、戦中の軍楽隊の国産楽器需要の高まりにより製造を試みることになった。オーボエは製造に成功したが終戦とともに中断され、ファゴットは原材料の問題で製造が難航し、製造されるようになったのは戦後のことであった。メーカーは、中小企業を含めオーボエは3社、ファゴットは2社確認できた。第3節「金管楽器」では、国産メーカーとして、トランペットは2社、フレンチホルンは2社存在するが、トロンボーン、ユーフォニアム、チューバは「ヤマハ」のみであることが確認できた。

本論を通して、フルート産業の特異性として二つの点を位置付けることができた。一つ目は、先駆者のメーカーが中小企業で今もなお現存しており、その楽器専門の業態をとっている点、二つ目は、「ムラマツ」と「ニッカン」の二つの母体企業から派生した中小企業が数多く活躍している点である。また、他の管楽器メーカーにも中小企業が存在するが、それらの企業の歴史はフルート産業と比較すると浅く、その数も少ないということも明らかになった。